夏目漱石

(一)

夏目漱石

（一）

新潮社版

日本文学全集　5

夏目漱石（一）

発行／1967年9月15日　十一刷／1969年10月25日
発行者／佐藤亮一　東京都新宿区矢来町71
発行所／株式会社・新潮社　東京都新宿区矢来町71
電話東京(260)1111(大代)　振替東京808　郵便番号162
印刷所／株式会社・金羊社　製本所／神田加藤製本所
本文用紙／本州製紙株式会社
函貼／三菱製紙株式会社　製函／文京紙器株式会社
カバー・扉・見返／特種製紙株式会社
表紙クロス／日本クロス工業株式会社

乱丁・落丁本はお取替えいたします　Printed in Japan　1967

目次

坊っちゃん　五
草枕　一〇一
野分　二〇一
こころ　三二五
注解　四九九
年譜　五二一
解説　伊藤整　五三三

试读结束：需要全本请在线购买： www.ert

夏目漱石（一）

坊っちゃん

一

親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりして居る。小学校に居る時分学校の二階から飛び降りて一週間程腰を抜かした事がある。なぜそんな無闇をしたと聞く人があるかも知れぬ。別段深い理由でもない。新築の二階から首を出して居たら、同級生の一人が冗談に、いくら威張っても、そこから飛び降りる事は出来まい。弱虫やーい。と囃したからである。小使に負ぶさって帰って来た時、おやじが大きな眼をして二階位から飛び降りて腰を抜かす奴があるかと云ったから、此次は抜かさずに飛んで見せますと答えた。

親類のものから西洋製のナイフを貰って奇麗な刃を日に翳して、友達に見せて居たら、一人が光る事は光るが切れそうもないと云った。切れぬ事があるか、何でも切って見せると受け合った。そんなら君の指を切って見ろと注文したから、何だ指位此通りだと右の手の親指の甲をはすに切り込んだ。幸ナイフが小さいのと、親指の骨が堅かったので、今だに親指は手に付いて居る。然し創痕は死ぬ迄消えぬ。

庭を東へ二十歩に行き尽すと、南上がりに聊か許りの菜園があって、真中に栗の木が一本立って居る。是は命より大事な栗だ。実の熟する時分は起き抜けに脊戸を出て落ちた奴を拾ってきて、学校で食う。菜園の西側が山城屋と云う質屋の庭続きで、此質屋に勘太郎という十三四の悴が居た。勘太郎は無論弱虫である。弱虫の癖に四つ目垣を乗りこえて、栗を盗みにくる。ある日の夕方折戸の陰に隠れて、とうとう勘太郎を捕まえてやった。其時勘太郎は逃げ路を失って、一生懸命に飛びかかって来た。向うは二つ許り年上である。弱虫だが力は強い。鉢の開いた頭を、こっちの胸へ宛ててぐいぐい押した拍子に、勘太郎の頭がすべって、おれの袷の袖の中に這入った。邪魔になって手が使えぬから、無暗に手を振ったら、袖の中にある勘太郎の

頭が、右左へぐらぐら靡いた。仕舞に苦しがって袖の中から、おれの二の腕へ食い付いた。痛かったから勘太郎を垣根へ押しつけて置いて、足搦をかけて向へ倒してやった。山城屋の地面は菜園より六尺がた低い。勘太郎は四つ目垣を半分崩して、自分の領分へ真逆様に落ちて、ぐうと云った。勘太郎が落ちるときに、おれの袷の片袖がもげて、急に手が自由になった。其晩母が山城屋に詫びに行った序でに袷の片袖も取り返して来た。

此外いたずらは大分やった。大工の兼公と肴屋の角をつれて、茂作の人参畠をあらした事がある。人参の芽が出揃わぬ処へ藁が一面に敷いてあったから、其上で三人が半日相撲をとりつづけに取ったら、人参がみんな踏みつぶされて仕舞った。古川の持って居る田圃の井戸を埋めて尻を持ち込まれた事もある。太い孟宗の節を抜いて、深く埋めた中から水が湧き出て、そこいらの稲に水がかかる仕掛であった。其時分はどんな仕掛か知らぬから、石や棒ちぎれをぎゅうぎゅう井戸の中へ挿し込んで、水が出なくなったのを見届けて、うちへ帰って飯を食って居たら、古川が真赤になって怒鳴り込んで来た。慥か罰金を出して済んだ様である。

おやじは些ともおれを可愛がって呉れなかった。母は兄許り贔負にして居た。此兄はやに色が白くって、芝居の真似をして女形になるのが好きだった。おれを見る度にこいつはどうせ碌なものにはならないと、おやじが云った。乱暴で乱暴で行く先が案じられると母が云った。成程碌なものにはならない。御覧の通りの始末である。行く先が案じられたのも無理はない。只懲役に行かないで生きて居る許りである。

母が病気で死ぬ二三日前台所で宙返りをしてへっついの角で肋骨を撲って大に痛かった。母が大層怒って、御前の様なものの顔は見たくないと云うから、親類へ泊りに行って居た。するととうとう死んだと云う報知が来た。そう早く死ぬとは思わなかった。そんな大病なら、もう少し大人しくすればよかったと思って帰って来た。そうしたら例の兄がおれを親不孝だ、おれの為めに、おっかさんが早く死んだんだと云った。口惜しかったから、兄の横っ面を張って大変叱られた。

母が死んでからは、おやじと兄と三人で暮して居

た。おやじは何にもせぬ男で、人の顔さえ見れば貴様は駄目だ駄目だと口癖の様に云って居た。何が駄目なんだか今に分らない。妙なおやじが有ったもんだ。兄は実業家になるとか云って頻りに英語を勉強して居た。元来女の様な性分で、ずるいから、仲がよくなかった。十日に一遍位の割で喧嘩をして居た。ある時将棋をさしたら卑怯な待駒をして、人が困ると嬉しそうに冷やかした。あんまり腹が立ったから、手に在った飛車を眉間へ擲きつけてやった。眉間が割れて少々血が出た。兄がおやじに言付けた。おやじがおれを勘当すると言い出した。

其時はもう仕方がないと観念して先方の云う通り勘当される積りで居たら、十年来召し使って居る清と云う下女が、泣きながらおやじに詫まって、漸くおやじの怒りが解けた。それにも関らずあまりおやじを怖いとは思わなかった。却って此清と云う下女に気の毒であった。此下女はもと由緒のあるものだったそうだが、瓦解のときに零落して、つい奉公迄する様になったのだと聞いて居る。だから婆さんである。此婆さんがどう云う因縁か、おれを非常に可愛がって呉れた。不思議なものである。母も死ぬ三日前に愛想をつかした——おやじも年中持て余している——町内では乱暴者の悪太郎と爪弾きをする——此おれを無暗に珍重してくれた。おれは到底人に好かれる性でないとあきらめて居たから、他人から木の端の様に取り扱われるのは何とも思わない、却って此清の様にちやほやしてくれるのを不審に考えた。清は時々台所で人の居ない時に「あなたは真っ直でよい御気性だ」と賞める事が時時あった。然しおれには清の云う意味が分からなかった。好い気性なら清以外のものも、もう少し善くしてくれるだろうと思った。清がこんな事を云う度におれは御世辞は嫌だと答えるのが常であった。すると婆さんは夫だから好い御気性ですと云っては、嬉しそうにおれの顔を眺めて居る。自分の力でおれを製造して誇ってる様に見える。少々気味がわるかった。

母が死んでから清は、愈おれを可愛がった。時々は小供心になぜあんなに可愛がるのかと不審に思った。つまらない、廃せばいいのにと思った。気の毒だと思った。夫でも清は可愛がる。折々は自分の小遣で金鍔や紅梅焼を買ってくれる。寒い夜などはひそかに蕎麦粉

を仕入れて置いて、いつの間にか寝て居る枕元へ蕎麦湯を持って来てくれる。時には鍋焼饂飩さえ買ってくれた。只食い物許りではない。靴足袋ももらった、鉛筆も貰った。帳面も貰った。是はずっと後の事であるが金を三円許り貸してくれた事さえある。何も貸せと云った訳ではない。向で部屋へ持って来て御小遣がなくて御困りでしょう、御使いなさいと云って呉れたんだ。おれは無論入らないと云ったが、是非使えと云うから、借りて置いた。実は大変嬉しかった。其三円を蝦蟇口へ入れて、懐へ入れたなり便所へ行ったら、すぽりと後架の中へ落して仕舞った。仕方がないから、のそのそ出て来て実は是々だと清に話した所が、清は早速竹の棒を捜して来て、取って上げますと云った。しばらくすると井戸端でざあざあ音がするから、出て見たら竹の先へ蝦蟇口の紐を引き懸けたのを水で洗って居た。夫から口をあけて壱円札を改めたら茶色になって模様が消えかかって居た。清は火鉢で乾かして、是でいいでしょうと出した。一寸かいで見て臭いやと云ったら、それじゃ御出しなさい、取り換えて来て上げますからと、どこでどう胡魔化したか札の代りに銀貨を三円持って来た。此三円は何に使ったか忘れて仕舞った。今に返すよと云ったぎり、返さない。今となっては十倍にして返してやりたくても返せない。

清が物を呉れる時には必ずおやじも兄も居ない時に限る。おれは何が嫌だと云って人に隠れて自分丈得をする程嫌な事はない。兄とは無論仲がよくないけれども、兄に隠して清から菓子や色鉛筆を貰いたくはない。なぜ、おれ一人に呉れて、兄さんには遣らないのかと清に聞く事がある。すると清は澄したもので御兄様は御父様が買って御上げなさるから構いませんと云う。是は不公平である。おやじは頑固だけれども、そんな依怙贔負はせぬ男だ。然し清の眼から見るとそう見えるのだろう。全く愛に溺れて居たに違ない。元は身分のあるものでも教育のない婆さんだから仕方がない。単に是許りではない。贔負目は恐ろしいものだ。清はおれを以て将来立身出世して立派なものになると思い込んで居た。其癖勉強をする兄は色許り白くって、迚も役には立たないと一人できめて仕舞った。こんな婆さんに逢っては叶わない。自分の好きなものは必ずえらい人物になって、嫌なひとは屹度落ち振れるもの

试读结束：需要全本请在线购买： www.ert

と信じて居る。おれは其時から別段何になると云う了見もなかった。然し清がなるなると云うものだから、矢っ張り何かに成れるんだろうと思って居た。今から考えると馬鹿々々しい。ある時抔は清にどんなものになるだろうと聞いて見た事がある。所が清にも別段の考もなかった様だ。只手車へ乗って、立派な玄関のある家をこしらえるに相違ないと云った。

夫から清はおれがうちでも持って独立したら、一所になる気で居た。どうか置いて下さいと何遍も繰り返して頼んだ。おれも何だかうちが持てる様な気がして、うん置いてやると返事丈はして置いた。所が此女は中々想像の強い女で、あなたはどこが御好き、麹町ですか麻布ですか、御庭へぶらんこを御こしらえ遊ばせ、西洋間は一つで沢山です抔と勝手な計画を独りで並べて居た。其時は家なんか欲しくも何ともなかった。西洋館も日本建も全く不用であったから、そんなものは欲しくないと、いつでも清に答えた。すると、あなたは慾がすくなくって、心が奇麗だと云って又賞めた。清は何と云っても賞めてくれる。

母が死んでから五六年の間は此状態で暮して居た。おやじには叱られる。兄とは喧嘩をする。清には菓子を貰う、時々賞められる。別に望もない、是で沢山だと思って居た。ほかの小供も一概にこんなものだろうと思って居た。只清が何かにつけて、あなたは御可哀想だ、不仕合だと無暗に云うものだから、それじゃ可哀想で不仕合せなんだろうと思った。其外に苦になる事は少しもなかった。只おやじが小遣を呉れないには閉口した。

母が死んでから六年目の正月におやじも卒中で亡くなった。其年の四月におれはある私立の中学校を卒業する。六月に兄は商業学校を卒業した。兄は何とか会社の九州の支店に口があって行かなければならん。おれは東京でまだ学問をしなければならない。兄は家を売って財産を片付けて任地へ出立すると云い出した。おれはどうでもするが宜かろうと返事をした。どうせ兄の厄介になる気はない。世話をしてくれるにした所で、喧嘩をするから、向でも何とか云い出すに極って居る。なまじい保護を受ければこそ、こんな兄に頭を下げなければならない。牛乳配達をしても食ってられると覚悟をした。兄は夫から道具屋を呼んで来て、先

祖代々の瓦落多を二束三文に売った。家屋敷はある人の周旋である金満家に譲った。此方は大分金になった様だが、詳しい事は一向知らぬ。おれは一ヵ月以前から、しばらく前途の方向のつく迄神田の小川町へ下宿して居た。清は十何年居たうちが人手に渡るのを大に残念がったが、自分のものでないから、仕様がなかった。あなたがもう少し年をとって入らっしゃれば、ここが御相続が出来ますものをとしきりに口説いて居た。もう少し年を取って相続が出来るものなら、今でも相続が出来る筈だ。婆さんは何も知らないから年さえ取れば兄の家がもらえると信じて居る。

兄とおれは斯様に分れたが、困ったのは清の行く先である。兄は無論連れて行ける身分でなし、清も兄の尻にくっ付いて九州下り迄出掛ける気は毛頭なし、と云って此時のおれは四畳半の安下宿に籠って、夫すらもいざとなれば直ちに引き払わねばならぬ始末だ。どうする事も出来ん。清に聞いて見た。どこかへ奉公でもする気かねと云ったらあなたが御うちを持って、奥さまを御貰いになる迄は、仕方がないから、甥の厄介になりましょうと漸く決心した返事をした。此甥は裁判所の書記で先ず今日には差支なく暮して居たから、今迄も清に来るなら来いと二三度勧めたのだが、清は仮令下女奉公はしても年来住み馴れた家の方がいいと云って応じなかった。然し今の場合知らぬ屋敷へ奉公易をして入らぬ気兼を仕直すより、甥の厄介になる方がましだと思ったのだろう。夫にしても早くうちを持ての、妻を貰えの、来て世話をするのと云う。親身の甥よりも他人のおれの方が好きなのだろう。

九州へ立つ二日前兄が下宿へ来て金を六百円出して是を資本にして商売をするなり、学資にして勉強をするなり、どうでも随意に使うがいい、其代りあとは構わないと云った。兄にしては感心なやり方だ。何の六百円位貰わんでも困りはせんと思ったが、例に似ぬ淡泊な処置が気に入ったから、礼を云って貰って置いた。兄は夫から五十円出して之を序に清に渡してくれと云ったから、異議なく引き受けた。二日立って新橋の停車場で分れたぎり兄には其後一遍も逢わない。

おれは六百円の使用法に就て寝ながら考えた。商売をしたって面倒くさくって旨く出来るものじゃなし、ことに六百円の金で商売らしい商売がやれる訳でもな

かろう。よしやれるとしても、今の様じゃ人の前へ出て教育を受けたと威張れないから詰り損になる許りだ。資本抔はどうでもいいから、これを学資にして勉強してやろう。六百円を三に割って一年に二百円宛使えば三年間は勉強が出来る。三年間一生懸命にやれば何か出来る。夫からどこの学校へ這入ろうと考えたが、学問は生来どれもこれも好きでない。ことに語学とか文学とか云うものは真平御免だ。新体詩などと来ては二十行あるうちで一行も分らない。どうせ嫌なものなら何をやっても同じ事だと思ったが、幸い物理学校の前を通り掛ったら生徒募集の広告が出て居たから、何も縁だと思って規則書をもらってすぐ入学の手続をして仕舞った。今考えると是も親譲りの無鉄砲から起った失策だ。

三年間まあ人並に勉強はしたが別段たちのいい方でもないから、席順はいつでも下から勘定する方が便利であった。然し不思議なもので、三年立ったらとうとう卒業して仕舞った。自分でも可笑しいと思ったが苦情を云う訳もないから大人しく卒業して置いた。

卒業してから八日目に校長が呼びに来たから、何か用だろうと思って、出掛けて行ったら、四国辺のある中学校で数学の教師が入る。月給は四十円だが、行ってはどうだと云う相談である。おれは三年間学問はしたが実を云うと教師になる気も、田舎へ行く考えも何もなかった。尤も教師以外に何をしようと云うあてもなかったから、此相談を受けた時、行きましょうと即席に返事をした。是も親譲りの無鉄砲が祟ったのである。

引き受けた以上は赴任せねばならぬ。此三年間は四畳半に蟄居して小言は只の一度も聞いた事がない。喧嘩もせずに済んだ。おれの生涯のうちでは比較的呑気な時節であった。然しこうなると四畳半も引き払わなければならん。生れてから東京以外に踏み出したのは、同級生と一所に鎌倉へ遠足した時許りである。今度は鎌倉所ではない。大変な遠くへ行かねばならぬ。地図で見ると海浜で針の先程小さく見える。どうせ碌な所ではあるまい。どんな町で、どんな人が住んでるか分らん。分らんでも困らない。心配にはならぬ。只行く許である。尤も少々面倒臭い。

家を畳んでからも清の所へは折々行った。清の甥と

云うのは存外結構な人である。おれが行くたびに、居りさえすれば、何くれと歎待なして呉れた。清はおれを前へ置いて、色々おれの自慢を甥に聞かせた。今に学校を卒業すると麹町辺へ屋敷を買って役所へ通うのだ抔と吹聴した事もある。独りで極めて一人で喋舌るから、こっちは困まって顔を赤くした。夫も一度や二度ではない。折々おれが小さい時寐小便をした事迄持ち出すには閉口した。甥は何と思って清の自慢を聞いて居たか分らぬ。只清は昔風の女だから、自分とおれの関係を封建時代の主従の様に考えて居た。自分の主人なら甥の為にも主人に相違ないと合点したものらしい。甥こそいい面の皮だ。

愈約束が極まって、もう立つと云う三日前に清を尋ねたら、北向の三畳に風邪を引いて寝て居た。おれの来たのを見て起き直るが早いか、坊っちゃん何時家を御持ちなさいますと聞いた。卒業さえすれば金が自然とポッケットの中に湧いて来ると思って居る。そんなにえらい人をつらまえて、まだ坊っちゃんと呼ぶのは愈馬鹿気て居る。おれは単簡に当分うちは持たない。田舎へ行くんだと云ったら、非常に失望した容子で、胡麻塩の鬢の乱れを頻りに撫でた。余り気の毒だから「行く事は行くがじき帰る。来年の夏休には屹度帰る」と慰めてやった。夫でも妙な顔をして居るから「何を見やげに買って来てやろう、何が欲しい」と聞いて見たら「越後の笹飴が食べたい」と云った。越後の笹飴なんて聞いた事もない。第一方角が違う。「おれの行く田舎には笹飴はなさそうだ」と云って聞かしたら「そんなら、どっちの見当です」と聞き返した。「西の方だよ」と云うと「箱根のさきですか手前ですか」と問う。随分持てあました。

出立の日には朝から来て、色々世話をやいた。来る途中小間物屋で買って来た歯磨と楊子と手拭をズックの革鞄に入れて呉れた。そんな物は入らないと云っても中々承知しない。車を並べて停車場へ着いて、プラットフォームの上へ出た時、車へ乗り込んだおれの顔を眺と見て「もう御別れになるかも知れません。随分御機嫌よう」と小さな声で云った。目に涙が一杯たまって居る。おれは泣かなかった。然しもう少しで泣く所であった。汽車が余っ程動き出してから、もう大丈夫だろうと思って、窓から首を出して、振り向いたら、

矢っ張り立って居た。何だか大変小さく見えた。

二

ぶうと云って汽船がとまると、艀が岸を離れて、漕ぎ寄せて来た。船頭は真っ裸に赤ふんどしをしめている。野蛮な所だ。尤も此熱さでは着物はきられまい。日が強いので水がやに光る。見詰めて居ても眼がくらむ。事務員に聞いて見るとおれは此所へ降りるのだそうだ。見る所では大森位な漁村だ。人を馬鹿にしていらあ、こんな所に我慢が出来るものかと思ったが仕方がない。威勢よく一番に飛び込んだ。続づいて五六人は乗ったろう。外に大きな箱を四つ許り積み込んで赤ふんは岸へ漕ぎ戻して来た。陸へ着いた時も、いの一番に飛び上がって、いきなり、磯に立って居た鼻たれ小僧をつらまえて中学校はどこだと聞いた。小僧は茫やりして、知らんがの、と云った。気の利かぬ田舎ものだ。猫の額程な町内の癖に、中学校のありかも知らぬ奴があるものか。所へ妙な筒っぽうを着た男がきて、こっちへ来いと云うから、尾いて行ったら、港屋とか云う宿屋へ連れて来た。やな女が声を揃えて御上がりなさいと云うので、上がるのがいやになった。門口へ立ったなり中学校を教えろと云ったら、中学校は是から汽車で二里許り行かなくっちゃいけないと聞いて、猶上がるのがいやになった。おれは、筒っぽうを着た男から、おれの革鞄を二つ引きたくって、のそのそあるき出した。宿屋のものは変な顔をして居た。

停車場はすぐ知れた。切符も訳なく買った。乗り込んで見るとマッチ箱の様な汽車だ。ごろごろと五分許り動いたと思ったら、もう降りなければならない。道理で切符が安いと思った。たった三銭である。夫から車を傭って、中学校へ来たら、もう放課後で誰も居ない。宿直は一寸用達に出たと小使が教えた。随分気楽な宿直がいるものだ。校長でも尋ね様かと思ったが、草臥れたから、車に乗って宿屋へ連れて行けと車夫に云い付けた。車夫は威勢よく山城屋と云うちへ横付にした。山城屋とは質屋の勘太郎の屋号と同じだから一寸面白く思った。

何だか二階の階子段の下の暗い部屋へ案内した。熱くって居られやしない。こんな部屋はいやだと云ったら生憎みんな塞がって居りますからと云いながら革鞄

を拋り出した儘出て行った。仕方がないから部屋の中へ這入って汗をかいて我慢して居た。やがて湯に入れと云うから、ざぶりと飛び込んで、すぐ上がった。帰りがけに覗いて見ると涼しそうな部屋が沢山空いている。失敬な奴だ。嘘をつきやあがった。それから下女が膳を持って来た。部屋は熱つかったが、飯は下宿のよりも大分旨かった。給仕をしながら下女がどちらから御出になりましたと聞くから、東京から来たと答えた。すると東京はよい所で御座いましょうと云ったから当り前だと答えてやった。膳を下げた下女が台所へ行った時分、大きな笑い声が聞えた。くだらないから、すぐ寝たが、中々寐られない。熱い許りではない。騒々しい。下宿の五倍位八釜しい。うとうとしたら清の夢を見た。清が越後の笹飴を笹ぐるみ、むしゃむしゃ食って居る。笹は毒だから、よしたらよかろうと云うと、いえ此笹が御薬で御座いますと云って旨そうに食って居る。おれがあきれ返って大きな口を開いてハヽヽヽと笑ったら眼が覚めた。下女が雨戸を明けている。相変らず空の底が突き抜けた様な天気だ。

道中をしたら茶代をやるものだと聞いて居た。茶代をやらないと粗末に取り扱われると聞いて居た。こんな、狭くて暗い部屋へ押し込めるのも茶代をやらない所為だろう。見すぼらしい服装をして、ズックの革鞄と毛繻子の蝙蝠傘を提げてるからだろう。田舎者の癖に人を見括ったな。一番茶代をやって驚かしてやろう。おれは是でも学資の余りを三十円程懐に入れて東京を出て来たのだ。汽車と汽船の切符代と雑費を差し引いて、まだ十四円程ある。みんなやったって是からは月給を貰うんだから構わない。田舎者はしみったれだから五円もやれば驚ろいて眼を廻すに極って居る。どうするか見ろと澄して顔を洗って、部屋へ帰って待ってると、夕べの下女が膳を持って来た。盆を持って給仕をしながら、やにやにや笑ってる。失敬な奴だ。顔*のなかを御祭りでも通りやしまいし。是でも此下女の面より余っ程上等だ。飯を済ましてからにしようと思って居たが、癪に障ったから、中途で五円札を一枚出して、あとで是を帳場へ持って行けと云ったら、下女は変な顔をして居た。夫から飯を済ましてすぐ学校へ出懸けた。靴は磨いてなかった。

学校は昨日車で乗りつけたから、大概の見当は分っ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ert